

日本語学習者の敬語学習への 向き合い方と敬語教育のあり方

徳間 晴美

「敬語は難しい」という声は、日本語学習者からよく聞かれる。具体的には、「敬語の形が多すぎて覚えるのが大変だ」（表現形式の複雑さ）、「頑張って敬語を使ったら、使い過ぎだと言われてしまう」（程度の難しさ）といった声のほか、「へりくだったりしたくない」「敬語を使うと距離ができて嫌だ」（母文化・母習慣に基づく抵抗感）、「です・ます体で話せば十分だ」「日本人も間違えている」（習得の必要性に対する疑念）、「間違えた時に誤解されるのが怖い」（表現意図が誤って伝わることへの恐怖心）など、心理的な抵抗感さらにはアイデンティティに関わる事情があり、敬語学習に向き合う姿勢を安定的に維持するのは容易ではない。

日本語学習者にも多様な学び方があるため一概には言えないが、総合的な日本語教科書を使う場合には、初級の終わりから初中級の段階で、ある程度体系的に敬語を学ぶことになる。しかし、教科書の学習項目の一つとしてシラバスに組み込まれた場合、敬語体系や表現形式の学習に時間がとられ、運用能力が身につくところまではいかないことが多い。このような学び方をした場合、学習者の中に「敬語は難しい」という印象だけが残るのも不思議ではない。

文化庁が2007年に示した「敬語の指針」（文化審議会答申）に立ち返り、敬語の重要性を確認すると、そこには「相互尊重」を基盤とし、敬語使用はあくまでも「自己表現」であるべきだとされている。この考え方に基づく敬語の重要性は、近年ようやく日本語教育で扱われてきてはいるものの、依然として、敬語は「固定的・絶対的な使い方がなされるもの」、あるいは「上下・親疎関係を明示するためのもの」という学習者の誤解も根強いものがある。

日本語学習者の敬語学習への向き合い方を考えるには、学習者がどのような考えで、どのような思いを抱きながら敬語学習に臨むのか、学習者の内面に迫る必要がある。これまで、学習者の内面に着目した敬語教育の研究では、敬語の学習成果に情意面が影響していることを明らかにした量的研究（鄧2011、2012）や、敬語使用不安を捉える中で、学習者の敬語の使用や学習に対する向き合い方は常に不安定であり、ジレンマに陥る可能性と隣り合わせであることを指摘した質的研究（徳間2010）などが見られる。日本語学習者の立場に立って敬語学習を考えると、敬語の使い方が自分を人としてどう表現するかにつながるという重要性がありながらも、敬語の習得や継続的な学習は容易ではないと言える。

日本語でコミュニケーションをする以上、敬語に全く触れずにいることは難しい。よって、日本語学習者の一人ひとりが、日本語を学ぶにあたって敬語学習とどう向き合うかを考える必要がある。どう向き合うか、すなわち敬語学習への向き合い方を方向付けるのは、日本語でコミュニケーションする私はどのような私でありたいのかという、日本語学習者による自分自身への問いであると筆者は考える。そして、この問いに向き合って考えるためには、敬語教育の中で、「日本語学習者としてのありたい自分」に向き合う場を創ること、そして敬語が持つ表現力を初級の段階から誤解なく学ぶ機会を提供することが必要である。日本語学習者が日本語のコミュニケーションにおいても、主体的に自分のあり方を形成できることに気づかせ、自分らしいコミュニケーションができるよう

支援することが重要であろう。

引用文献

- 鄧曉梅（2011）「台湾人日本語学習者の敬語学習における情意的意識とその学習成果に関する一考察」『日本語教育研究』No.57,109-123.
- 鄧曉梅（2012）「日本語の敬語の学習効果と敬語に関する情意的要因の影響関係：台湾人日本語学習者を対象として」『南山言語科学』No.7, pp.33-45.
- 徳間晴美（2010）「中上級日本語学習者が抱く敬語使用不安の様相－学習者のことばに基づく質的分析による事例－」『言語文化と日本語教育』第40号,pp.41-50.
- 文化審議会（2007）「敬語の指針（答申）」文化庁
〈http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/sokai/sokai_6/pdf/keigo_tousin.pdf〉
(2019年9月2日閲覧)